



vol.25
 マスターブロイ
 目黒醸造所代表
 あさ か こう
浅香光 さん

こだわりの詰まったビールを飲んでいただきたい

「ビール作りで一番大切なのは、酵母です」と浅香さん。酵母は、酒を作るときに使う微生物。「通常は業者から仕入れますが、それだとロット販売で高いんです。うちは40ℓの寸胴で作るので、そんなに多くは必要ない。なので、培ってきた知識と経験から自分で培養しています。多分他ではやってないんじゃないかな」と自信をのぞかせます。手掛けるビールの特徴を聞くと、「ガス圧が強いので泡立ちがいいんです。勢いよく注ぐと泡が結構な量になるので、収まるのが待ちきれずにそのまま飲んで、『泡を食べてもおいしい』なんておっしゃるかたもいます。雑味もなく苦味も抑えてあるので、飲みやすいと思います。ビールは苦手でも、うちの飲んでビールが好きになったという話を聞くと本当にうれしいですね」。



「地元の方々とのつながり」を何よりも大切に

営業が苦手だと話す浅香さん。「今の時代に珍しいですが、マスターブロイにはホームページがありません。インスタグラムとフェイスブックはありますが、あまり更新してなくて。ネットに頼らずに、人とのつながりを大事にやっていくというのは、ずっと続けていきたいですね」。最後に、区民へメッセージをお願いすると、「これからも、地元目黒を一番に考えていきたいです。特別なものではなく、日常のおいしさとして、ずっとそこにあるビールになっていたらうれしいです。これからもビールで目黒を盛り上げたいです」と笑顔で話してくれました。

プロフィール

目黒区出身。ドイツ・ベルリン工科大学で醸造学を修める。帰国後、クラフトビール会社でビール作りに従事。その後、区内初のクラフトビール醸造所・マスターブロイを開く。ビール以外で好きなお酒はハイボール。

全て自分の目が届く環境でビールを作りたい

ビール醸造所開業までの経緯を伺うと、「きっかけは成り行きでした」と浅香さん。日本で地ビールがはやりだした頃、偶然出会ったドイツ人マスターのビール作りを手伝ううち、本格的に学びたくなり、本場ドイツの大学へ留学。「ディプロム・ブラウマイスターという国家資格を取得し、帰国後クラフトビール会社に就職しました。会社はレストランを併設しており、毎日ビールサーバーをセッティングし、味の確認をしてベストの状態でお客さまにお出ししていました。ある時、他店で同じビールを飲んだら、いつも自分が整えている味と違ったんです。管理状況などでこんなに味が変わってしまうのかと驚きました」。

独立後、より良い状態でビールを飲んでもらいたいと考えた浅香さん。「全てが自分の目の届くやり方が一番いいのでは」と思い、仕込みから配送までの全工程を一人で行う、現在のビール作りにたどり着きました。まずは少量生産で回転数を上げることにこだわろうと。このやり方だと、少しのスペースさえあればどこでもできます。だったら生まれ育った土地でと、目黒で始めることにしたんです」。

▼マスターブロイが飲めるお店などの詳細は、インスタグラム、フェイスブック(コード①②)をご覧ください



▶黄色ラベルがオリジナルラガー。赤ラベルはよりフルーティーなアンバーラガー。黒ラベルはコクが強いブラックラガー。店頭販売あり。取り扱い店も随時募集中
 目黒本町4-20-7
 時毎週金・土曜日17:00~21:00(不定休)



go to

TOGO MURANO'S ARCHITECTURE

村野藤吾の建築
 目黒区総合庁舎



建築家 村野藤吾氏

独自の作風で300を超える個性豊かな建築を設計し、1984年、93歳で亡くなるまで数々の賞を受賞した、日本を代表する近代建築の第一人者

vol.6 南口エントランスホール

日本を代表する建築家・村野藤吾氏の作品の一つとして知られている総合庁舎の魅力を紹介していくシリーズ。

目黒区総務課庁舎管理係
 ☎5722-6107、✉5722-9315)



アクリルのオブジェ



室内池



アクリルオブジェと室内池

南口玄関棟を入ると高い天井のエントランスホールになっており、床も壁も白大理石張りです。左手には、十字型のアクリルのオブジェが配置されています。オブジェ越しには低い地窓から小石を敷き詰めた庭が見え、外光が間接照明のように差し込みます。右手には、地窓から入る光が室内の池の水面に反射して天井を淡く映し出し、窓の外には中庭が広がります。

広がり演出する非対称の壁

エントランスホール内を見渡すと、左右の造りが非対称になっていることに気がきます。右手の室内池には柱があり、左手のオブジェ側には柱がありません。そして、正面のガラスプロックのある出入り口の中心から見ると、池側の方が広がっています。

実は、オブジェ側の壁をホール内側に寄せ、柱を外部に出しているのです。

村野は、エントランスホールをあえて非対称に造形し、少し調子を変えることで空間的な広がりが出てくることを意識していました。